教職あらかると

保護者・地域・教師への講演（要旨）＆感想

家庭、地域、学校が連携して子供の生きる力を育む！

2020.02　後藤　忠

1　子供の生きる力の衰退・生活の危機

- 情緒の不安、乱れ
- 耐性の欠如
- 社会性の未発達
- 自立の遅れ
- 規範意識や倫理観の未形成
- 人間の尊厳の軽視

➢ 問題の根底には

⇩

自尊感情の乏しさ、自己肯定感の低さがある

「自分にはいいところがない」
「自分には人に誇れるものが何もない」
「自分はダメな人間である」
「自分に自信がない」　　など

※　この傾向は学年が上がるにつれ、また、10年前より現在が顕著になっている。

2　子供は大人を映す鏡

自尊感情の乏しさや自己肯定感の低さは大人も同じで、**1**で挙げた諸様相はそのまま大人にも当てはまる。つまり、子供は大人を映す鏡、社会を映している鏡にすぎない。子供に責任はない。

「大人が変われば子供は変わる」
「人(子供)は変えられないが自分は変われる」
大人にはその覚悟が必要である。

3　自己を肯定的に見つめる学習の大切さ

「道徳」の学習は自己を見つめる学習である。

しかし、その学習は自己の短所や欠点を見つめ、それを改善するための学習であってはならない。

逆に、自尊感情が豊かになり、自己肯定感が高まる学習であらねばない。「自分はまんざらダメな人間ではない」「自分にもよいところがある」「自分は価値ある存在だ」という思いが膨らむ学習でなければならない。

そうした学習を繰り返すと、自己を肯定的に見る習慣が自然に身に付いてくる。

そうすると、他の人のことも肯定的に見ることができるようになり、自分を棚に上げて一方的に他の人を責めるような恥ずかしいことはしなくなってくる。

道徳性の高まりとは、自己を見つめる力の高まりのことであり、生きる力の高まりのことである。

4　家庭、地域、学校が連携し、子供の生きる力を育む

子供の生きる力を育むには、家庭、地域、学校の「連携」が欠かせない。それぞれが担う役割と責任を誠実に果たし合いながら、教育や養育に当たることが絶対に必要である。

自己が担う役割や責任を果たそうとせず、他に丸投げしたり、他にばかり求たりしていたのでは連携は成り立たない。

では、三者が連携して取り組むべき共通課題は何か？　それは子供の自尊感情や自己肯定感を高めることである。

その課題を達成するためには、

子供への愛を真ん中に据えて『ならぬものはならぬ』を徹底すること　である。

「どんなにしたくなくても、せねばならぬことはせねばならぬ」、「どんなにしたくても、してはならぬことはしてはならぬ」

このことを徹底することである。子供はまだまだ大人からの他律を必要としている。だからこそ躾や教育が必要なのである。

子供が褒めてほしい時に褒め、叱ってほしい時に叱ることができる大人にならなければならない。叱られないで育った子供は褒められないで育った子供と同じくらい不幸なのだ。

5　生きる力を育む家庭の役割

家庭は「憩いの場」でなければならない。家に帰るとホッとする、心身が癒される…。家庭で十分な栄養と休養を得た家族は、気力と体力を

充溢させて、再び外の世界へと向かう、家庭はそんなオアシスのような場でありたい。

もうひとつは、人間としての基本的な生活習慣を身に付ける場である。とは言え、特別に高級な生活習慣のことではない。ごく普通で平凡な生活習慣のことである。例えば、朝、近所の人に会ったら「おはようございます」とあいさつをするとか、道路に100円落ちていたら黙ってポケットに入れないとか、そういった類のことである。

こうした基本的な生活習慣を身に付けることによって子供の情緒は安定する。つまり、社会生活に不自由さ（困り感）を感じない基本を身に付けているからである。

6　生きる力を育む地域社会の役割

日々の生活の中で人々が味わう様々な喜びや悲しみを分かち合い、助け合い、協力し合って暮らす場、それが地域社会である。

しかし、その地域社会が、都市、地方の区別なく崩壊が進んでいる日本の現状がある。

昔から、崩壊家庭とか家庭教育力が弱いなどの家庭はあったものだが、近所のおじさん、おばさんたちが「みんな街の子だから」といってそうした子供も一緒に抱え込んだものだ。だから子供は大崩れしなかった。子供は愛を感じ、恩を感じて成長した。

しかし、今はそれが崩壊の危機に瀕している。その原因についていろいろ言われているが、少なくとも、地域住民が「自分たちの家族がこの地域に住むことでどんな恩恵（メリット）が得られるか」を志向する限り、その地域は絶対に再生しない。逆に「この地域に対して自分たち家族が貢献できることは何か」を志向すると地域は一変する。

しかし、中には貢献しようにもできない事情の家庭はある。それはそれでよいのである。今は何もできなくても、志向だけ180°　変えるだけで、不思議なことに地域は再生する。

7　生きる力を育む学校（教師）の役割

学校は子供のために一生懸命働く場である。

子供の喜びを我が喜びとし、子供の悲しみを我が悲しみとして、善行を称え、非行を諌め、ひたすら子供の健全な成長を願って働く、それが教師の仕事である。

子供に向き合い、子供のよさや可能性を積極的に見出し、認め、褒め、励まし、伸ばす、それができて半人前の教師である。

さらに、子供のために本気になって叱ることができる、それで一人前である。

ところが近年、子供を叱れない、叱ることをためらう教師が増えてきたという。一体どっちを向いて仕事をしているのか。

教師は校長の顔色を見て仕事をしてはならない、まして親の方を向いて仕事などしてはならない。真っ直ぐ子供だけを見て仕事をしなければならない。

子供を叱れない教師が増えた背景には、子供を叱ると文句を言って来る親がいるという。親は教師に自分の子育てを批判されたとでも思うらしい。

とんでもない、親と子供は別人格である。「親は親、子供は子供」というごく当たり前の人間摂理が分からない幼稚な親に学校が翻弄されている現状は実に情けない。

赤の他人である「先生」が親も目を見張るほどの深い愛をもって我が子を本気で指導してくれる、そのことに感謝できず、逆に文句を言って来るような親はダメな親である。親の風上にも置けない。

校長の仕事はそういうダメな親から教育愛に燃える教員を守り、育てることである。

教育委員会（地域住民の良識ある代表機関として）の仕事は、そういう校長を守り、支援を惜しまないことである。

そうしたら子供の生きる力は自ずから育つ

《　講演感想より　》

「眠くなってしまったらどうしよう…」と思うようなじいさん（失礼ですみません）が出てきたと思ったら、すごく面白いことを話す方で笑いながら聞かせていただきました。

道徳の授業はきれい事の押し付けのイメージがありましたが、「思いやり」や「心遣い」ではなく、その素になる「心」や「思い」を育てることが目的と聞いて、道徳の授業の存在意義を認識できました。（自分は「思いやり」や「心遣い」を習

ったような気がします…。）

自尊感情や自己肯定感、どちらも家庭内で育むことが難しい、ないし不可能な家庭が増えているような気がします。学校で全ての子供にその機会が与えられるべきだと思います。近隣のＩ小(M市)のママの話では、子供がピリピリした環境に置かれているように感じました。後藤先生なら変えられる、助けてあげてほしい、そんな気持ちになりました。

笑えただけでなく、新しい知識、視点をたくさんいただきました。ありがとうございました。

（１年生男児の母）

「道徳」とは何か？　私自身、漠然としたこの言葉に正しく答えることができませんでした。後藤先生がおっしゃるには、何かのために行動を起こす前の「心」「思い」を大切にすることだと聞いてすごく納得しました。まず、自分が「どう思うのか」そこがなければ行動に移せないからです。家庭でも状況を見て、「気付いているか？」「どう思っているか？」問いかけてみたいと思いました。そして「してはならないこと」「やらなければならないこと」をはっきり教えていきつつ、家庭では「くつろげる憩いの場」になれるよう私自身も気を付けていきたいと思います。

すぐに結果が分からない道徳ですが、10年後、20年後の成長した姿を見るのが楽しみになりました。　(5年生女児の母)

自分が小学生の時に受けてきた「道徳」の授業って、何を学んできたんだっけ？とふと思い返してみました。国語、算数などの教科に比べても「これ」っていう記憶がないのは、目に見えない〝心〟を育む学習だったのだと今になって知ることができました。

小学校での学びは学習の基礎は勿論ですが、こうやって〝心〟を育てていただけていることに気付かされました。率直に、講座を受けて良かったと思えました。ありがとうございました。

そして、家庭や地域の役割についても改めて考えさせられ、親として、大人として、自分の子供は勿論、共に育つ地域（学校の子供たち）との関りも深めていきたいと思えました。

「自分と一生付き合うのは自分」という先生のお言葉が今の私自身にも刺さり、生き方を考える機会を頂けたように思います。

最後の「縁を生かす」のお話は涙なしでは聞けませんでした。素晴らしい講座をありがとうございました。　(1年生男児の母)

講師の後藤先生の話を聞いて、道徳について学ぶべき、考えるべきなのは私たち親の方なのだと、気持ちが引き締まりました。

ついつい結果をすぐに求めがちでしたが、長い目で子供を見守り、自分自身が変わる姿を子供が見て感じられるよう努めていかないと、と思いました。多くの保護者に聞いてほしいお話で、学んでほしいと思いました。　(4、5年生男児の母)

お話が大変面白く、眠くなることなく聞けました。たくさん勇気付けられるようなお話があり嬉しかったです。また機会があれば参加したいです。

(1年生女児の母)

講演会ではＨ小学校の道徳教育の取り組み姿勢等を理解することができ、子供を通わせる親の立場として非常に安心することができました。

道徳教育について家庭でもできることをしっかりやっていきたいと思います。　(2年生男児の父)

後藤先生のお話はとても心に残る素晴らしいお話でした。後藤先生は「道徳の授業を子供が週１時間受けて、自分の心を見つめるとても大切な時間です」とおっしゃいました。子供たちにとっては本当に大切な時間だと私も思いました。

「縁を生かす」のお話も、私自身自分の心を見つめるとても貴重な時間となりました。先生のお話を今後の子育てや生活に活かしていきたいと思います。

今後も道徳の授業を通じて、子供が自分の心を見つめ、自分のことも友達のことも大切にする心や生きる力を育んでほしいと思います。

また、家庭でも子供との日々の会話やふれ合いを大切にして、時には親子一緒に心を見つめる時間を大切にしたいと思います。　(2年生女児の母)

文責：後藤　忠